

IV.こみせ通りの変容と現状

1. 発生、形成、衰退

江戸時代に形成され確立した黒石のこみせ通りは、最盛期には山形町、前町、浜町（一部）、横町、上町、元町に、総延長約4,800メートルの長さに及んでいたが、全国各地の他のこみせ通りあるいは雁木通りと同じく、明治に入ってから時代の流れとともに変容を余儀なくされた。

多くの都市で衰退を招いた要因としては、以下のような例が挙げられる。

- ①火災で焼失した後、木造の庇状の構造が類焼を招きやすいという危険性が指摘され、再建されなくなった。
- ②鉄道網が充実していくにつれ街道交通が衰え、人々が集まらなくなり自然に消失していった。
- ③第二次世界大戦の前後には、流通機構が変化して市場に商品が出回らなくなり閉店せざるを得ない商店が相次ぐことにより、連続性が確保できなくなり、通りとしての価値が薄れていき加速度的に消滅していった。
- ④急速な車社会の発達に対応するために道路の拡幅などが進められるとともに取り壊されてしまった。

黒石の場合も、明治前期までに数回の大火に見舞われて、大きな被害を受けているが、多くのこみせを持つ建物が、幸いにも焼失を免れて現在まで残っている。

また、大正に入ってから国鉄黒石駅の開設や、その後の高度経済成長と車社会の到来によって、人と物の流れが変わり、かつて商店街として繁栄した地区のほとんどが、幹線道路として通過するのみになってしまったためこみせが消滅したことや、商店が次々と姿を消して住宅地になってしまったという事実がある。

2. 中町に存在し続けたこみせ

このような状況の中で、こみせが、中町地区を中心に、ある程度の連続性を保って現存していることの価値は、計り知れ



大正元年 元町



昭和7年 元町大通り



昭和7年 横町通り



昭和7年 山形町大通り

ないものがあるといえよう。

中町のみせ通りが伝統的な形態を維持しながら現在まで残ってきたことについては、様々な理由が考えられる。商業上の発展から取り残されて近代化による破壊が遅れたという説もあるが、むしろ、中町にある商店の業種の特殊性からこみせ通りの消滅を免れたという点を重要視したい。中町には、酒造業、呉服屋、仕出し店、銭湯、米屋など、近代的な店構えに改造しなくても成り立つ業種の商店が多かったということである。むしろ昔ながらの重厚な店構えであることが、商売上有利に働くこともあった。

また、長年住み続けている世帯が多く、共同体としての意識も高いことや、幼いころから当たり前存在していたこみせに対する無意識の愛着なども、こみせを連続した通りとして残すことに繋がっていたのではなかろうか。



昭和7年 中町大通り



昭和8年 前町を行く葬列

3. こみせ保存のための動き

全国的な流れとしても、高度経済成長により国土開発と都市化が急激に進んだことによる弊害として、多くの自然環境や歴史的環境の破壊が問題になり、昭和50年文化財保護法が改正され伝統的建造物群が文化財の種別に加わったこともあり、歴史的町並みの保存整備のための取り組みが各地で展開されていくようになった。



昭和14年 元町での防空訓練

黒石においても、昭和58年に伝統的建造物群保存調査報告書を作成しているが、残念ながら、この時には伝統的建造物群の指定には至っていない。伝建群制度が住民に正しく理解されていなかったことが、第一の理由であった。伝建群指定によって受ける規制や保存修景の費用の個人負担に対する不安、伝統的建造物になじまず商売上の利益が望めない業種の人々の反対などにより、指定は不可能となった。しかし、同時に行われた黒石市民に対する意識調査の結果、「こみせは共同利用空間である」、「こみせは自分のものであって自分のものではない」という根本的な意識があることが確認できている。こみせは所有者のものであるがその利用については共同のものであるということが、市全体の合意として存在していると考えられる。

明治、大正、昭和14年までの写真は
津軽書房「ふるさとの歩み黒石」より

平成元年、黒石市民のこみせに対する思いの強さを顕著に表した出来事が起きている。中町で長年商売を続けていた商家が、土地をマンション業者に売却せざるを得なくなったときに、こみせ通りにそぐわないマンションの建設を阻止するべく、25名ほどの市民が協力して7000万円近くの現金を用意し、売却予定日の前日にその土地と建物を取得したのである。その後「こみせ駅」という名称で、津軽三味線の生演奏、みやげ物販売、蔵を利用した多目的ホール運営などさまざまな活動を展開してきており、中町の活性化と観光に大きな役割を果たしている。

祖先から受け継いだ貴重な文化財でもある「こみせ」を保存し、「こみせ通り」の伝統的な景観を保存し、次の世代に残していこうという意識は、さらに、魅力ある黒石を作り活性化させるとともに、観光資源としても大きな力にしようという動きにも繋がっていった。平成11年黒石市が策定した「黒石市中心市街地活性化基本計画」において、「こみせが輝き、真の豊かさを実感できる街—こみせを核にしたまちづくり—」というコンセプトを掲げて、「歴史的資産であるこみせをまちづくりに活かし真の豊かさを増幅させるために」様々なプロジェクトを計画している。

また、平成14年には、こみせ保存会が結成された。学習会、研究会、重伝建地区に選定されている地区との交流などを通して、「こみせ通りを歴史・文化の面で全国的に価値ある文化財として認め、こみせ通りの保存・修復に努めるとともに、まちおこしに寄与することを目的」として、活発な活動をしている。

以上のように、現在、黒石では、こみせ通りの重要性や必要性が認識され、その保存整備に向けて各方面が協力するという体制ができつつある。ここで忘れてはならないのが、江戸時代から連綿と受け継がれてきたこみせ通りに対する人々の思いと、その歴史的背景を持った伝統的な形態の特性と価値を、正しく次世代に伝えていかなければならないということである。そのために、地域住民と地域外の人々、あるいは行政と民間、それぞれの立場でそれぞれの視点を持ちつつ、互いに協力していくことが大切であろう。



昭和35年 元町通り



昭和47年 黒石よさ祭